

学園の中で生まれ育ち、東大卒業後は文部大臣秘書官などを務めて、1968年に須賀学園に戻られて以来、現在もお元気に勤務されている須賀 淳先生(3代目理事長・須賀学園学園長)に、須賀学園の温故知新をお伺いしました。



須賀学園 学園長・3代目理事長
須賀 淳

昭和24年東京大学を卒業。文部省に勤務、文部大臣秘書官、初等中等教育局教科書課長、初等教育課長などを歴任し、昭和43年須賀学園に戻る。栃木県私立中学高等学校連合会長、栃木県公安委員長などをつとめた。

本校前庭にある須賀栄子先生の銅像の台座についてお聞かせください。

栄子先生から献身的な教育を受けた卒業生の手で、先生が急逝された翌年に先生の大きな銅像が校庭に建立されました。碑文には、その出生から教育一筋の功績が認められて天皇陛下から単独拝謁を賜るまでが記されています。



須賀栄子先生の銅像台座

その銅像は、太平洋戦争中の貴金属供出令により国に献納され、残された台座は宇都宮大空襲で焼け、大きなひびが入りました。その台座を2010年に旧校地から睦町の現校地に移し、戦災復興記念のモニュメントとしました。

お祖母様としての栄子先生は、とても子煩悩な方であったと伺っています。

栄子先生は生徒と寝起きを共にしておられましたので、私は校内の寄宿舎に遊びに行き、学校に泊まることもよくありました。栄子先生から当時としては高価な子ども用の自転車を買ってもらい、また夏休みには避暑地の河原子海岸(茨城県日立市)に連れて行ってもらいました。そこには学校経営を一身に背負った女性校長の姿はなく、一緒に生活できたことは良い思い出です。

栄子先生の生い立ちからして、学校の教育理念が形成されたのではないのでしょうか。

御存命であれば147歳になります。先生の御両親が早く亡くなったので、幼な子を育てるために長女の寿賀が宮中の勤めから郷里に戻りました。その寿賀は明治天皇の女官として皇女の養育に当たっていましたから、栄子先生兄妹たちはおのずと厳しく筋の通った教育や躾を受けたと思います。

栄子先生が小学4年の時に手作りしたコンパス(直井研二氏複製・写真)があります。先生が兄姉の多い中で贅沢せずに黙々と勉強した姿や、賢さ、器用さを彷彿とさせます。



コンパスの複製

27歳、独身で自ら本校を創立されました。

栄子先生が学ばれた栃木県尋常中学校(現在の県立宇都宮高校、当時は女子部があった。)の卒業生の進学先を見ると錚々たるものです。栄子先生は利根川にやっと鉄橋が架かった頃の1889年に上京し、名門の大成学館で学び、世界情勢に開眼されました。官尊民卑や男尊女卑の時代にあつて確固たる女子教育への信念を持ったのでしょう。

それにしても当時の女性の地位に鑑みても、27歳で「共和裁縫教習所」を創立した情熱・闘志には感嘆し、敬服のほかありません。

1910年の創立10周年には、松が峰の新しい校地に大きな本館を新築しました。前庭の石畳はいつもきれいに掃き清められ、保護者がその場で草履を脱いで出入りしたというエピソードは、現在に語り継がれています。

年々、入学志願者が増えて、1910年に松が峰の校地(現在の須賀学園研修所はその一部)を購入しました。本館は和洋折衷の2階建て2棟で、そのほかに大きな教室が4棟あり、寄宿舎もありました。当時の記録には授業料月60銭、寄宿舎費 食事込み8円と記されています。学校では昼間に生徒が縫った和服を職員が夜に点検し、それを更に確認する深夜の校長栄子先生の姿がありました。創立15周年記念には校旗(写真)を制定し、創立以来の卒業生は743名になりました。



戦前の校旗



創立の翌年、共和裁縫女学校となる(明治34年)

生徒増を迎えて1922年、足尾銅山の大きな建物を払い下げて貰うために、その解体作業に出向いた先生の武勇伝は有名です。

生徒数増加に伴い教室が不足しましたので、11月に職人10数名を引き連れて足尾へ行き、翌3月の雪解けを待ってその建物を移築し、8月末に第4・第5校舎が竣工しました。その直後、9月1日の始業式当日に関東大震災がありましたが、栄子先生は不屈の魂でそれを乗り越え、翌年、文部大臣認可(今は短大・大学が文部大臣認可)の「宇都宮須賀女学校」となり、卒業生は専攻科および研究科を含め2,600名を数えました。本校の研究科を卒業すると、小学校専科教員の免許状が交付され、現在の短大のランクになりました。研究科には栃木県内外の県立女学校の卒業生も多数入学し、学校は大きく発展しました。丁度その年に私が生まれたのです。



文部大臣認可の宇都宮須賀女学校

1929年から世界大恐慌、日本の農村恐慌に見舞われ、学校にとって大きな試練となりました。

本校は県内初のバザーが名物催事となり、第一次世界大戦後の好景気により入学志願者も増加して隆盛を極めましたが、この世界大恐慌と日本の農村恐慌により、一転して学校運営は大きな痛手を受けました。このため、栄子先生が還暦の1932年には、全校生徒数は5年前の半数に激減してしまいました。これは県立学校も同様でした。

それにめげず先生は打開策を講じて、「宇都宮女子高等職業学校」と改称し、財政困難の中、特待生制度も充実させました。

1934年に先生の功労が国から認められ、天皇陛下から単独拝謁を賜る栄誉を頂きました。しかし、その直前に突然の脳溢血で急逝されました。前日まで、陣頭指揮を執り続け、教育に身を捧げた生涯でした。



宇都宮女子高等職業学校の和裁授業

以上、学校の変遷と栄子先生の足跡を伺ってきましたが、ここで卒業生から寄せられた声をもとに。

第2期生の手記には、「校長先生は、並びなき英才とうたわれ、気品高く、優れた識見をもち、若々しくご立派でした。」「勉強としつけの両面から厳しく鍛えられた。」と記されており、栄子先生の身を挺しての教育方針が察せられます。その一方で、「日曜日には寄宿生を連れてハイキングに行き一緒に歌いました。」と楽しく家庭的な思い出も綴られています。

校長の立場でなく、我が子を育てるように慈しみをもって接した様子が偲ばれます。

本校創立時には、栃木県には女子校が県立の宇都宮女学校1校しかなかったため、本校には栃木県をはじめ遠くの県からも裕福な家庭の子女が入学して、レベルの高い女学校でした。寄宿舎には県内外から多数の生徒が集まりました。

1922年の卒業式の式辞が、卒業生の励みになっていると伺いました。

「初心忘るべからず、全人教育(人間形成の教育)の理念を守るために私はすべてを尽くした。」という創立者栄子先生の気持ちが入っています。「これからの人生には多くの苦勞が待ち構えているかも知れないが、一步一步を踏み固めつつ、先人の足跡をただ追うのではなく、自分の力で新しい足跡を刻もうではないか。」と、今日でも胸の奥底に響く言葉を卒業式の式辞に残されています。

結びに、これからの学園に第3代の淳先生が託す思いを、お聞かせください。

創設者が掲げた建学の精神が、時代の変化と社会のニーズに呼応しながら、これからも受け継がれていくことを願っています。

創立時からの個性溢れる教育研究を通し、世界に羽ばたく新しい教育のあり方を追求してほしいと思います。

インタビュー後記

文部省から学園に戻られて以来半世紀余、96歳の現在でも豊饒として多数の先生方とともに大きな職員室の真中で勤務されている須賀淳学園長に、創立者須賀栄子先生の思い出と歩みを語って頂きました。私は高校音楽科の第3期生として友正先生・華子先生の時代から今日まで、学園の発展と共に50余年お世話になっていますが、第3代の淳先生のお話を伺うことができ、至福の時間となりました。



インタビュー
宇都宮短期大学 副学長 直井 文子

足利市出身。宇都宮短期大学附属高等学校音楽科第3期生。桐朋学園大学ピアノ科を卒業と同時に本学に勤務し、これまで数多くの演奏家や音楽指導者を社会に送り出している。